直死の魔眼で千恋＊万花

あるにき

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

七夜式は死んだ。

次の瞬間目に入ったのは1人の神だった。

七夜式は穂織の町で何をなすのか?!

完結目指して頑張ります

目　次

序章　考え方がすこし物騒な主人公は田舎町にやってきました
少年の死　あるいは神との邂逅 ―― 1
少年の成り立ち ―― 4
登校日 ―― 7
入学 ―― 11
少年は『魔』と出会う。 ―― 18
うっす！オレ祟り神に遭遇しました ―― 23

序章　考え方がすこし物騒な主人公は田舎町にやってきました

少年の死　あるいは神との邂逅

突然だが、俺、七夜式はいわゆる前世の記憶をもっている。

前世にて俺は、七夜という退魔の家に生まれ。最高傑作なんて言われるぐらいに立派な退魔師――――もとい殺人鬼になった。

しかし、その反面、異端者としても扱われた。通常七夜の生き方をしていれば一般社会に溶け込めるような性格になるはずもない。しかし式は、俺は違った。

普通の少年だったのだ。殺す、ということをチキンと理解していない、無垢な殺人鬼ではなく。

殺人の良し悪しを正しく理解した上でなお、普通の少年だったのだ。

故に異端。

誰よりも卓越した殺人鬼は――殺人貴は殺人鬼として大切なものを欠落している、と。

そして、七夜の人間によって殺された。

気がつけばそこにいた。

「ここは…？」

ここはどこだろう。

なんだか、暖かいのに――――何も無い。無だ。

不思議と暖かい気持ちになる一方でここはどこだ、と辺りを見渡す。

するとそこには1人の少女が立っていた

「式さん…あなたは死にました」
そう、悲しそうな顔で告げた。
この子はきっと心の優しい子なのだろうな、と思うと同時に物凄くコロシタクナッタ
「それは知っているよ。今さっきのことだからね。しかしここは…いや貴方は？」
俺はその衝動に耐え、絞り出すようにして声を発した。
「貴方の衝動については理解しています。ですがすみません…しばらくの間我慢してくださいますか？」
退魔衝動
七夜の人間が人ではないものを見た時に起きるもので無性に殺したくなる
「全く状況が掴めないが…分かった…」
一呼吸してから
「それで貴方は？」
「そうでしたね、すみません！　私は…神です」
「精神病院はっと…」
「ありませんから!!」
やばい、なにやら物凄くやばい子に捕まった…
「考えていること…わかりますからね…」
うっ…
ほ、ほんとに神なのか？神にゃん？
「なんでにゃん？…」
「いや可愛いかなって」
「!!…とにかく貴方は死んだのです。貴方には選択肢があります。」
「選択肢？アンタを殺す機会でも貰えるのかな？」
貴方からアンタになってしまった。反省せねば…
「いえ、というか今の貴方には殺せません。私は」
「そうだろうな。神を殺すなんて、死を見るみたいな超常的な力がないと出来っこない」
「そこです。」

「そこ？」
「貴方は本来なら数年後に　直死の魔眼　というものを得るはずでした。
　しかし、残念なことに…」
「なるほどね、じゃあその直死の魔眼を俺にあげてあの世界に返してくれるって訳？」
　しかし、あっちに帰るにしてもなぁ…
「いえ、そっちではありません」
「む？」
「別の世界です」
「あー第二魔法だっけ？並行世界の運営。あれ？」
「少し違いますが似たような考えで問題ないでしょう。え？何故使えるのかって？神ですし」
　まぁ、別世界では、適度に殺して人生を普通に満足できるよう頑張るかな
「そのいきですよ！式さん。…ちなみに貴方は未来…死ななかった場合は『天然無自覚型女たらし』として有名？でしたから」
「お、俺そんなやつなのか?!」
「えぇ、私もあの世界にいたら惚れたのちに地雷踏まれてぶん殴ってますね」
　な、なるほど、気をつけねば…
「では、そろそろお時間です。――――――――――――――――――――楽しい来世を」
「――――――ありがとう、」
　そして、俺は生まれた。
　七夜式として

少年の成り立ち

転生してから、いわゆる前世の記憶を思い出したのは４歳の頃だった。

まだ、正しく言葉を発せられなかった記憶が戻っていない俺はよくわからない奇声をあげていた。父と母の微笑ましいものを見る目はとても恥ずかしく、ここにナイフがあったら十七分割にしていたかもしれない

そして俺の生まれた七夜家はかなりの名家でボンボンだった。俺は長男として生まれ、テーブルマナーだの、お勉強だの、運動、コミュニケーション能力の育成だのをさせられた。

勉強は普通より少しできる程度だったにしろ、七夜流体術はやはり体に染み付いており、やはり七夜（前世の方の）の最高傑作と言われるだけはある高い身体能力を見出した。

コミュニケーション能力は自身では普通だと思っていたもののクラスメイトなどには『コミュ力おばけ』の異名。

影では『天然無自覚型女たらし』と言われていたことに式は気づかない。

次に魔眼。

神によるものなのかはしらないが、前世にてあらかじめもっていた浄眼も引き継がれており、直死の魔眼をオンオフが可能ではあった。

しかし、魔眼使用時にかかる脳への負担はなかなかのもので、使うタイミングは見計らった方がいいと考えていた。七夜流体術と浄眼だけで『魔』には対抗できるのだから問題はなかった。

それとみんなおなじみ『七ッ夜』だが何故か俺の部屋のタンスに入っていた。解せぬ

そして気づいたこと。

今俺が住んでいる七夜邸は東京にある。

俺はもともとＹＡＭＡ育ち系男子。都会の空気が合わないのだ。それ故、友達に誘われたとき、つまり用がなければ意味なく外に出ることはなかった。

（それでも『コミュ力おばけ』と言われていたのには式の圧倒的すぎるコミュ力が原因）

しかし、ネットなどがあるだけで遊ぶことに関しては暇することもなく、充実した日々を過ごしていた。

唐突だが七夜式の思いつきは度を過ぎている。家や学校にて会話中や、ぼーっとしている時に「唐突に閃いた！」とどこかの女剣士のスキル使用時のボイスを用いて行われる。

そしてそれはある雨の日にもあった訳で…

「唐突に閃いた！」

株やろ。

それから2年が経過し、式個人の通帳の額は既に七夜家総資産を上回っていた。具体的には●●●億円。

やがてお金稼ぎに飽きた式はやはり都会の空気が合わないことに苦渋していた。

家のものに頼んで日本各地の田舎町の情報を取り寄せてもらい。

気に入ったところに引っ越そうと考えていた。

ちなみにそのころやはり七夜家後継者に抜擢されていた式だが悩みに悩んだ結果、それを断りほぼ破門という形で引っ越すことになるが本人は気にしない。

そして引っ越す場所を決めた式は早速そっちに家を作らせ、向こうの学校に転向する手続きを済ませ、家のことを弟（ほぼ無能）に押し付けた。この時既に高校二年生。

そして、肝心の引越し先。

そこの地名は穂織。

文明開化からも取り残され、周囲との交流を避けてきた、古きよき時代の街並みと温泉街。そこに惹かれた理由はそこにあったＹＡＭＡ。

写真越しにもわかる『魔』の気配。

田舎で、そして『魔』のいる町。
最高じゃん。その一言に尽きていた。
このころ既に叢雨丸のを抜いた男が巫女姫さまの婚約者になっていたがそれを知っているものは少数。
転生してきた七夜式と有地将臣が出会うのはいまから3日後のお話。

登校日

というわけで穂織。
文明開化からも取り残され、周囲との交流を避けてきた、古きよき時代の街並みと温泉街。
そこに向かうに当たって、電車に乗ってタクシーに乗ってきた。
タクシーの運転手によくわからない小言を言われたので色々聞いてみたところここはどうやらすこし曰く付きの場所らしい。最後に『気をつけなよ?』と言ってくれたあたり根は優しい人とみた。
そして新しい家で何日か過ごした後についに登校日だ。
何事も区切りよくやりたい性なので、ＹＡＭＡに行くは今日からにしようと思っている。既にご近所に挨拶はしたので家ですることもなく、かといって出かけるのも登校日からがいい…
少々難儀な性格だが、登校日までは家で惰眠を貪っていた。
そして登校日。

迷子

「どこやん…ここ…」
よくわからないが住宅街…ではないが
まだ時間的にしまっている店しかないが商店街?のようだ。
歩いているのは数人で学生服を着た人は見当たらない。
ちなみに、制服は…何というか和と洋をごちゃ混ぜにしたような服だ。ダサいわけではないが変わっている
もしやもう学校が始まっているのでは?と不安になる。
まずい!初日から遅刻は嫌だ!
仕方ない、誰かに聞こう…
そうおもいいたり、近くにいた女性に話しかけた。
「すみません、学校ってどこですか?」
「え、学校?…あ、もしかした君が七夜式君?」

驚いた。何で知っているのだろうか。挨拶に行った近所の家の娘さんなのだろうか？
「うふふ…何でって顔してるね？」
「そうですね、何でですか？」
「まぁ、もともと小さい街だからね。そーゆう情報はすぐ回ってくるのさ。…それに」
「それに？」
「あんな立派なお家作っちゃったらね、いやでもきになるよ。どんな人が暮らすんだろう…って」
「あー…なるほど。下ネタじゃないですよ。
それなりの家を建てましたからねぇ…納得です」
俺は家を建てさせたと前回言ったが、建てた家はかなりでかい日本家屋だ。（衛宮邸イメージ）

「あんなに大きな家を建てるなんて、お金持ちなのかな。おぼっちゃま？」
そう冗談交じりに聞いていた女性。嫌味とかではなく姉が弟をからかうような、そんな口調。
「まぁ、お金持ちではありますけどね、家も。
でもあれを建てたときに出したのは僕のお金ですよ？」
ここで拗ねたりせず、少しだけ砕けたように話す。
「ええ！…七夜ってなにもの？」
「ただのＹＡＭＡ育ち系男子ですが？」
「ほんとにぃ？…あ！そういえば学校だったね。学校はね…」
そう言って道を教えてもらった。ふむ、俺は真逆を歩いていたようだ。
「ありゃ、真逆だったんですね。ありがとうございます、親切にしてくださって。よければ名前を聞いてもいいですか？」
「あ！そういえばなのってすらいなかったね。アタシは馬庭芦花だよ。」
「知ってるとおもいますが、七夜式です。よろしくお願いします」

「うん、よろしく！」
　しかし、
「まにわろかさん…みたところ俺の少し上ぐらいだとおもいますけど、働いているんですか？」
　高校生ではないのかな？というかニュアンスを込めていうと。それに気づいてか
「うん。アタシはそこにある甘味処でオーナーやってるの。」
「へぇ、若いのに。それに外国人の観光客も増えてるって聞きましたし、大変ですねぇ」
「そこらへんが原因で、お父さんにお店の営業押し付けられちゃってね」
「ありゃりゃ、それは災難？ですね」
「そうでもないよ？お店をやるのは楽しいし」
「そうなんですか。では災難、なんて言ってしまってすみません」
「そんな！頭上げて！…って！学校は?!」
「学校…は?!」
　忘れてた!!やばい何時からなんだろ！もう遅刻?!ま、まずいぞぉ！
「たしか…あと五分ぐらいでホームルームが始まるね。ここからじゃもう間に合わないかなぁ…
　ごめんね、引き止めて」
「いえいえ、楽しかったですから。それとよければ、話し方崩してもいいですか？僕も長く住むわけですから。早く友達も欲しいんですよ」
「そんなの学校でもできると思うけどね。キミ、コミュ力高そうだし」
「せっかく美人と知り合ったんですから。縁は大切にするものですよ」
「び、美人?!そ、そうかなぁ。お、お世辞でも嬉しいよ…」
　いやべつにお世辞でもなんでもないんだがな。
　すると、深呼吸をしたお姉ちゃん（芦花さん）が
「それで、話し方だっけ？いいよ全然、何なら『お姉ちゃん』なんて呼んでもいいんだよ？」
「そうか？じゃお姉ちゃん。これもきっと何かの縁だ。よろしくな」

「!!～あはは…意外と恥ずかしいなぁ」
ならやるなよ。とはいえない
「じゃ！俺は行くよ。教えてくれてありがとう、お姉ちゃん」
まるでいたずらが成功した時のような表情で言ってみる。
「!!と、とっとと行ったーー!!」
「ありゃ、ぞんざい」
「じゃ、またなー」

少年が角を曲がって見えなくなったところで大きなため息を一つ。
「美人だなんて…あんな美形の子に言われたら照れちゃうよ…」
「それに、まー坊のこと言い忘れちゃったし。」
幼馴染にあたる彼がひょんな事に今日からここの学校に通うことになっている。伝えて絵けばよかったと後悔しながら、式くんの容姿について想いを馳せる。
黒髪黒目。しかしそのどちらも少し青みがかっている。少し地味だが、それでも常にニコニコしていたことからその地味さを感じさせず、十分イケメンの類いだろう。
「あれ？」
そこで芦花は気づく。
「彼、東京生まれ東京育ちって話だったんだけどなぁ」
式がＹＡＭＡで育ったのは前世の話。今世においては東京生まれ東京育ちの都会っ子。
そこに疑問を抱きながらも、事情があるのかもしれない、と深く考えないようにする芦花であった。
そのころ式は、
「ふんぬーー!」
誰もいないことをいい事に七夜（前世）の身体能力をフル活用して1分で到着したのだった。

入学

「あなたが、七夜式君ですね」
　む？学校ついたら開口一番誰かに声をかけられた
「はい、そうですよ。あ、もしかして先生の方ですか？」
　ふと思ったんだけどさ。
　入学初日って最初に職員室行くじゃん？その…ホームルームまであと2、3分。
　…遅刻じゃん…
「あ、あはは…ギリギリセーフだったりしませんかね？」
「職員室へ行くのを放課後にしたらとりあえず、問題ないでしょう」
　お、よかったぁー
　是非もないヨネ!!
「でもよかった、遅いから迷ってるんじゃないかって心配になったけど、案の定迷っていたんですね」
　よかった？
　そう、青色で軽くうねりのある髪をした女教諭言った。
「初めまして！あなたの担任になる中条比奈実です」
「よろしくおねがいします。七夜式です。」
「はい、よろしくお願いします」
「すみません、迷ったりなんかして」
「ほんとですよ？もう、もう1人の子は大丈夫だったんですけど…」
「む？もう1人いるんですか？転校生」
「え？あぁ、そうなんですよ。有地将臣君。教室で会えると思いますよ」
　へぇ、仲間だ。
　転校初日の妙な緊張感がなくなるなぁ…
「しかし、後回しにしてもいいんですか？本人確認の書類だってあるでしょうに」
「そのことですか？一応、事前にもらっている写真と顔も一致してますし、問題ないでしょう！」

大有りなような気もしなくはないなぁ
そうは思ったものの俺がなかなかこないことで気を遣わせていたとするなら申し訳ない。そういうことは言わない方がいいだろうか
「ではもうほんとに時間がありませんし、教室に行きましょう？」
「はーい、教諭」
この人の声は…覚えた
教室の前まで来た。「この学校かなり小さいんですねぇ」とか話題はあったが流石に時間もないので同級生に聞こう。
「ほら、そこにいるのが有地将臣君です」
「あの人が……あっ！ねえ！」
「ん？先生に…そっちは？」
そこで気づいた。
こいつなんか変だ。微かに『魔』の匂いがする。なんだ…？
『魔』に触れたことがある？そんなところか…？わからない。
それよりも
「俺、七夜式。同じ転校生でね
よければ仲良くしてくれるとうれしいよ」
「有地将臣だ。よろしく」
そう言ってから
「しかし転校生？俺がいうことじゃないがこんな田舎に転校するなんて変わってるな」
「田舎がすきなんだ。ちなみに…有地は？なんで引越しして来たの？」
「え?!そりゃ、婚約とか」
聞こえるか聞こえないかそんな小さい声で言われたもののバッチリ聞こえた。が、からかうのはやめておこう。
「婚約？俺も何度か縁談組まれたことはあるけれど、やっぱり気は進まないよねアレ。妙にぎこちない空気がさ…苦手で」
「縁談ってお前。もしかしておぼっちゃまかなんかなのか？」
「２回目。まぁ、家は金持ちではあるかな。」
「２人とも！早く入って来てください!!」

「は、はいっ！」
怒られた。こりゃもう有地のせいだな。ほらっ、謝れ。迷惑かけてごめんなさいって！ほら！
そんなニュアンスを込めた目を察してか有地も
「いや、ふたりでな？」
はいはいはーい

「今日からお世話になります。有地将臣です。ここには家の事情で引越して来ました、以前は――」
そう有地が当たり障りのないことを言っている。
ここは俺が一発笑いをとらなければ…
▶？昆布豆豆太郎
声マネ
脱ぐ
うむ。一本笑いをとらなければっ！
「ありがとうございます。じゃあ次七――」
「はい！」
遮るようにして、一歩前に出る。
「ごほん。昆布豆豆太郎だ。気軽にお豆さんと呼んでいいぞ」
「？！？！」
教諭と有地は驚いている。一方生徒たちの頭にはハテナマークが浮かんでいる。
「昆布豆豆太郎…？そんな名前のやついるのか…？」
誰かが言った。
「お豆さん…合わない…」
また誰かが
「ふざけた名前だな…」
誰かが…
「お前名前違うじゃん。だいたいそんな名前のやつなんていないよ」
誰かが…って有地だ。

「おい。」
　俺は有地に向きなおって。
「誰がいないと決めた？いるかもしれないだろ？いいか？この世の中にはな０と１００はないんだ。お前は今全国の豆太郎さんを侮辱しているんだぞ？わかっているのか？
　ほら、全国の豆太郎さんに謝るんだ」
　俺が「お前最低だな」とでもいうような目でいうとその勢いに押されたのか有地は
「ぜ、全国の豆太郎さん…？すみません…」
「それでいい　反省することは大切だ」
　と言いながら俺は頷いておく。正義はなされたぞ、全国の豆太郎さん。
　一人でさも正論をかざして悪を倒したような気持ちに浸る
　それはそうと
「七夜式だ。よろしく」
「「「「お豆さん?!?!?!」」」」

　でさ、なんで教室に緑髪の幼女がいるわけ？しかも人間じゃない。例の類だ。コロシタイ
　しかしまぁ、有地や銀髪の娘や黒髪の娘が周りにいるせいでどうにも殺せないな。そいつらには見えているようだがやはり一般人には見えないようだ。

　俺が見えるのは浄眼があるおかげか？
　始業式を終え職員室で手続きをしている
「ん。じゃあもう言って構わない。これからよろしくな、七夜」
「はい。よろしくおねがいします！式でいいですよ？」
　職員室にいた教諭に言われるがまま手続きを済ませ、教諭と少し話している。
「お前は一人暮らしだったな。あんな立派な家を建てて。

やはり、あの七夜グループはすごいな。今度いい酒奢れよ」
「あはは、ちなみにあの家自腹ですけどね。あ、いいですよ？ググッと行きます？」
「おい未成年！…
って自腹って言った？」
「はい。うちの会社よりお金持ってますからね、俺」
ちなみに、今世における七夜はかなりの大企業だ。
「あ、じゃ俺戻りますね！明日からよろしくです！教諭」
「おお、また明日な」
軽く引いている教諭は無視
そのまま帰ろうとしたが、俺のクラスの方から話し声がする。
すると中条教諭が出てきた。
そのタイミングで気配を殺し、教諭と入れ替わるようにしてこっそり中に入る。
…気づかれてはいないようだ。
なかには有地。銀髪の娘、黒髪の娘、あと白衣の女性が1人と…
「叢雨丸を抜いたことによる影響は何かあったりしますか？」
なにそれ強そう
それにさっきの幽霊（？）幼女もいる。
にしてもあんな幽霊を十七分割にできたらどれだけ…！
…いかん。基本的に七夜の考え方は捨て用としているのだけれどねぇ
「特には。私自身は、いつもと何も変わりません」
話が読めないなぁ…

それからたわいない会話を少ししし出して
「有地さんに、そこまで心配するほどの傷が？」
傷？あいつ怪我してるのか？そんなそぶりはなかったが…
「頭も打っていたし、祟り神に触れた部分もありましたから。あくまで念のためですよ」
祟り神…『魔』のことか…？

わからないことも多いが今日山に行ってみればわかるだろう…
む、有地と白衣の女性が保健室に行くようだ。
やべ、こっち来るじゃん。油断していた、ここまで近づかれるとあの黒髪の娘あたりには気づかれるかもしれない。
何故って？あの娘おそらくクノイチってやつだろう。
足運びとかが、主人を守る人間のそれだ。しかし大して強いようでもないようで、別段殺したいとも思わない。
っと、とにかく逃げねば
「だれっ?!」
やはりか。
うむ、しかしあれで顔を認識できないだなんてまだまだだな。
「ど、どうしたの茉子？」
「いえ、誰かいた気がするのですが…」
誰もいないよ。俺以外
「しかし…誰もいないようですね、思い過ごしでしたか。すみません…」
いいよ、許してやる
「そうかい？…じゃあ行こうか有地くん」
「はい」
「待つのじゃ、ご主人～」
え、なにあの喋り方。

家に帰った俺は山に行くための準備を進めた。
釣り道具だ。
なにを隠そう俺の趣味の一つは釣りだ。
都心にいたとこはあまりできなかったが前世ではかなりやった。
ここに来るにあたりそれなりのものを買ってしまったりもしたが、

さていかなる魚がつれるのやら…
楽しみだ。
「やべ、『七ツ夜』忘れるとこだった」
『七ッ夜』とは七夜家（前世）に伝わる宝刀だ。とはいえ、別段値打ちものというわけではないのだが。恐ろしく頑丈だ。俺も何度こいつの耐久性に守られたかわからない。
「よしっ、行ってきますかね」
俺は山に行く。
この頃既に祟り神のことなど頭になかった

少年は『魔』と出会う。

唐突だが、前世にて青崎橙子という人間とオレは面識があった。
出会いは偶然。
人里に降りてきていた時に、怪奇事件に遭遇したオレは事情聴取とやらのせいでその場にとどまることとなった。
しかしそのとき不意にも魔術の気配がし、音を殺して近づけばそこにいたのは青崎橙子だったというわけだ。
なんでも魔術をつかって現場を調べようとしていたらしい。
その事件は彼女のおかげで無事解決した。
彼女にはいろいろな事を教わった。
それと同時に七夜式〝個人〟に対する暗殺の依頼などを受けていた。ギブアンドテイクと言えるだろう
ある日聞いたことがある
「俺みたいな殺人鬼が一般社会に溶け込みにくいのはもう知ってるけどさ。溶け込んでいる奴もいるんでしょ？
先達者がどうやって溶け込んで行ったのか、とか知らない？」
と。式とて別に溶け込んでいなかったわけではない。溶け込めるからこその異端者だったのだが。
しかしそれはそれとして異質ではあったのだ。故の質問。これに彼女は
「ふむ…キミのようなタイプであれば…仕事のときとそうでない時でオンオフをつければいい。
しかしキミも区切りをつけろ、と言われてすぐにできるとは思えまい？であれば…私のように眼鏡を掛けたときとそうでないとき。それによって口調を変えるように、キミは…たしか仕事のときは着物の魔術礼装を着ていたな。
であれば、着物のときと洋服のときで性格、考え方を切り離せばいい。最初は魔術による暗示でも良いが時期なれる。」
簡単に言ってくれる。と思っていたがなまじできてしまったので文句も言えまい。

そして俺は着物のときに退魔衝動を集中させることによって、洋服のときはちょっと考え方が物騒な男子になったのである。

――そしてこの男、私服は前の学校の制服を除いて着物しか持ってきていないのである――

「つれるもんだなぁ」

釣りをしていた。

口調が変わることは許してほしいが。

久々の釣りは良好で始めて３０分にして１０匹だ。

「しかし、釣りも好きだがやっぱり誰かをぐちゃぐちゃに解体したいものだよ」

しかし、

「有地もいいよな…あんなかわいい娘と婚約…結婚か…」

指輪とかしてなかったし、大方、家同士の都合ってとこかね。

ご苦労なこった。家と縁を切った身としてはなんとも言えない気持ちだよ。ホント

「眠い…」

いい具合に光が当たり、川の音、鳥のさえずり…

眠い…

２０分ぐらい寝たって問題はないよな…

大丈夫だろ…うん…大丈夫…だいじょ…う……ぶ

……

「はっ!!!」
「暗い!!」
む、２０分と言わず夜まで寝てしまっていたようだ…
辺りは真っ暗。それこそ七夜の人間だからこそ夜目はきくほうだが…
暗いことに変わりはない。
…？この気配は…
「『魔』か？」
それも少し外れた真っ当な魔とは少し違う。しかし七夜の家が相手取っていた『魔』とも違うように感じる。具体的には分からないが…
…少し近づいてみるか
「さて…こちらの『魔』はどんなものなのかね？楽しい殺し合いができることを祈るよ」
この男。やはり七夜である。
…もしかしたら一族がこの男を殺したのは間違いだったのかもしれない。
「ん？あれか…」
とても生き物には見えない。
４本足で狼のようだが足元は泥のようになっていて全身が紫がかった黒色だ。
まぁ、細かいことはいいや。とやかく考えてるうちにコイツら３匹になりやがったしな。
そんなことより
「さぁ殺し合おう」
今は目先の殺し合いを楽しむのが最優先だっ――！

ワタシたちは今、祟り神を祓っている。
ワタシの名前は常陸茉子。
そしてそのワタシがつかえている芳様。
その2人で、だ。
有地さんはいない。有地さんはこの地に伝わる叢雨丸を抜いてしまった人だ。そのため叢雨丸に宿るムラサメ様も認識できるようになり、我々の事情を知らないまま森に入って祟り神に襲われた。のちにお祓いに後から参加してきたがそのときは彼のおかげで祟り神を祓うことができた
流石に今日は芳乃様が釘を刺していたのでこないだろう。
有地さんは芳乃様の婚約者だ。
それ故にこの祟り神の子に巻き込んでしまったことを心苦しく思うが、これからお祓いにこないのであれば問題はないのだろうか…
まぁ、どうにかして自分も参加しようとはしているらしい…
しかし今日は祟り神が多いらしい。
すでに1匹祓っているのでそれで終わりと思いきや芳乃様の耳はまだ消えない。
芳乃様は祟り神に…妖に呪われた家の娘だ。その祟り神がいると見えるようになるその獣耳は最初の段階であればワタシたちのような祟り神と関係のある血筋の人間にしか見えないものの、ゆくゆくは普通の人にも見えるようになる。その耳を見たものは言った「呪われは姫だ」と。ワタシの常陸家がつかえてきた主人の家を侮辱され大変に気分が悪くなる。しかし、今はお仕事中。一刻も早く祟り神を祓わなくてわ。
「芳乃様、お体は大丈夫ですか?」
「え、ええ。大丈夫よ茉子。それとあっちだと思う」
「ええ。そのようですね。
では行きましょう。」
「うん」
2人で川のすぐ近くまで来た。

そこで目にしたものは…

「さあ殺し合おう」

着物姿の有地さんと一緒に転校して来て、町外れ…つまりはワタシの家の近くにとても大きな日本家屋を作ったことで少し有名で、転校初日の挨拶でかなりふざけていたものの常にニコニコしていてとても話しやすそうな印象を受けた、七夜式さんが――――――楽しそうにナイフを構えている姿だった。

うっす！オレ祟り神に遭遇しました

「うそ…」
とっさに叫ぶことはできなかった。あまりにも唐突すぎて。
「？どうしたの、茉子」
そういって後ろから顔をのぞかせた芳乃様はキョトンとした顔から、一気に驚愕の顔へと変わり
「危な――」
「!!」
危ない！と叫ぼうとしたのだろう。
しかしできなかった。
理由は、七夜式さんの放つ強烈な殺気に飲まれてしまったが故に――
「っ！っ！」
ワタシは必死に声を出そうとしたものの無理だ。声どころか足一つ動かせない。芳乃様をみるとワタシよりひどい。全身が震えまるで腰が抜けたようにビクビクしている
「――――――」
「よっ、……よし、の……さマ……」
そう、絞り出すようにやっと発っせた言葉は霧散し、月明かりの下に消えていく

七夜式さん…貴方は一体……

む？何人か見ているなはじの方の木の陰に隠れているが…
殺気は感じない。むしろ、怯えているようにも感じる視線。

…あぁ、なるほど俺の殺気か
これで怯えてて大丈夫なのか？
俺は隠れている奴らが人の殺気ってものを知らないのだと予想する。
理由は、この怯えの視線。それは俺にのみ向けられている。つまりこの『魔』について知っているということ。
この地の退魔師ということだ。
なんにせよ、終わったら話を聞かないとな
今は目の前の『魔』に集中だな

「じゃあ、いくぞ？」
そう言って駆け出した。
周りにある木々をつかり飛躍し、
相手の真上にきた瞬間に技を繰りなす。
――閃鞘・八穿
七夜暗殺技法の一つ。頭上から斬りかかる上段奇襲攻撃
「グルァァァ！」
「ははっ！こんな声だったのか！」
閃鞘・八穿をまともに受けた『魔』の1匹は身悶え、転げ回っている。

…しかし
考えているとさらに1匹がこちらに攻撃を仕掛けてくる。まるで触手のようなものが高速でこちらに向かってくるが、オレはそれを体勢を低くすることで回避。
そしてその低い体勢を利用して
――閃鞘・九盗
七夜暗殺技法の一つ。
低い体勢で足を狙う技。
触手のようなもので攻撃してきた方の『魔』の4本足、内二本を切断しバランスを保てなくした。

…あぁ、さっきから疑問だったんだ。だってこいつらあまりにも…
「弱い…」
あぁ、弱いのだ。もっと強いのを想像していたが、これはハズレだったかな。考えても見たら人里の山にそれほど強力な奴がいるはずもない。
「まあいいさ。ストレス発散ぐらいにはなるだろう」
そう言って
――閃走・水月
主に森の中で活躍する七夜暗殺技法の一つだが、なぜ使ったかといえば簡単だ。
観客がいるから
単にそんだけの理由だった。
そして最初に閃鞘・八穿を使ったやつに向かって――
「斬刑に処す」
――閃鞘・八点衝
七夜暗殺技法の一つ
七夜暗殺技法にしては珍しい近距離技にして八つの斬撃をほぼ同時に繰りなす。
するとまるで霧散するように、成仏でもするように消えていった。
あと2匹。

足を二本切り落とした奴の懐に入り、
――閃走・六兎
七夜暗殺技法の一つ
目に見えぬ六の蹴りを繰りなす。
そしてそれを受け空中に蹴り飛ばされ、そのまま
――閃走・六魚
七夜暗殺技法の一つ
二回蹴りつけ最後には蹴り落としを頭に食らわせる技。
地面に叩きつけられた『魔』は先ほどと同じように消えていった。
あと1匹

…がなんと逃げ出した。
「な?!腰抜けがっ！」
しかも2人が隠れている方向に、だ。
意図してそちら側に逃げているようではなく、たまたまのようだがそれでも気づかれてしまっては危険極まりない。
「…え？」
「よ、芳乃様！」
2人も気づいたようだ。
黒髪の子が銀髪ケモミミ少女をかばうように前に出る。
…ケモミミ？
え、まじ？もふりたい
ってそんなこと考えている場合じゃない。
ふと、黒髪の子の足がすくんでいるのがわかった。これは式の知り得ない話だが、本来、『祟り神』が敵前逃亡などまずあり得ないことだし、それに加えてこの逃走スピードだ。普通の『祟り神』の何倍も早いスピードなのだ。慣れているととはいえ流石に力んでしまうのは道理であるが…余談である。
「…ま、仕方がないか。フィナーレだ」
――閃鞘・七夜
本来なら目の前の敵の横をとうり側にい切りつける技だが、あの『魔』よりもオレの方が早い。
少女2人に襲いかかろうとしている『魔』を優に追い越し、追い越し側に的確に普通の生物なら急所となりゆる首を切り、『魔』は消えていく。
「??!!」
このスピードなら普通は驚くものだろう。2人は驚愕の表情だ。
うむ。
「吾は面影糸を巣とする蜘蛛。――ようこそ、このすばらしき惨殺空間へ。」
とはいえ、観ていた以上こちらにも聞きたいこともある
「お客様。本日はご来場、誠にありがとうございます。しかしながら

お客様？本日の舞台は完全予約制となっております。無許可でのご来場の罰として、情報提供を要求しますが――どうされますか？」
「――ちょ、ちょっと！一体何なんですか！貴方は?!ふざけていないでください真剣に話し合いを――」
銀髪ケモミミ少女…あれ、ケモミミがない
なるほど、『魔』と関係しているのだろう。ともあれそれも後で聞けば良い話。
着物を着ている今のオレはとにかく好戦的だ。自分で言う話でもないがまともな対話なんて期待できない。だからほら
「こちらの要望を飲まない場合、別の罰として――置いていってもらうぞ？」
口調が戻ってしまう。
「な、何をですか…」
「……」
２人は次のオレの言葉を待つようにじっとしている。
「なにってそりゃ…――――――あんたらの首だ」
最大の殺気を込める
「!!!!」
２人は胸を抑える。
今の殺気は心臓をナイフで刺すイメージで込めたものだ。
まるで、心臓を本当に刺されたかのように感じたのだろう。胸を触っても血もなければ痛みもないことに戸惑いながらも目の前にいる、つまりオレという圧倒的な―死―に恐怖している。
「――なんてね、別に今のオレは殺人趣向者じゃないんでね。んじゃまぁ、話し合える場所に移動しようぜ？」
「…は、はい。でしたら芳乃様のご自宅に…」
「う、うん…そうね茉子」
「一回着替えてからそっちに向かうよ…って場所しらねぇや」
そういってとりあえず一時解散となったのだった